

(2) 罪種の相互比較による犯罪遭遇世帯の発生状況

犯罪遭遇世帯の発生状況について、個々の罪種を相互比較しながら分析する。

なお、以下の罪種別比較において、自動車やオートバイ、自転車を保有している世帯、万引き被害の可能性職業従事者のいる世帯を分母として計算することが必要と判断される場合については、そうした条件をコントロールして計算した値を併記している。

① 罪種の相互比較からみた犯罪遭遇世帯の発生状況

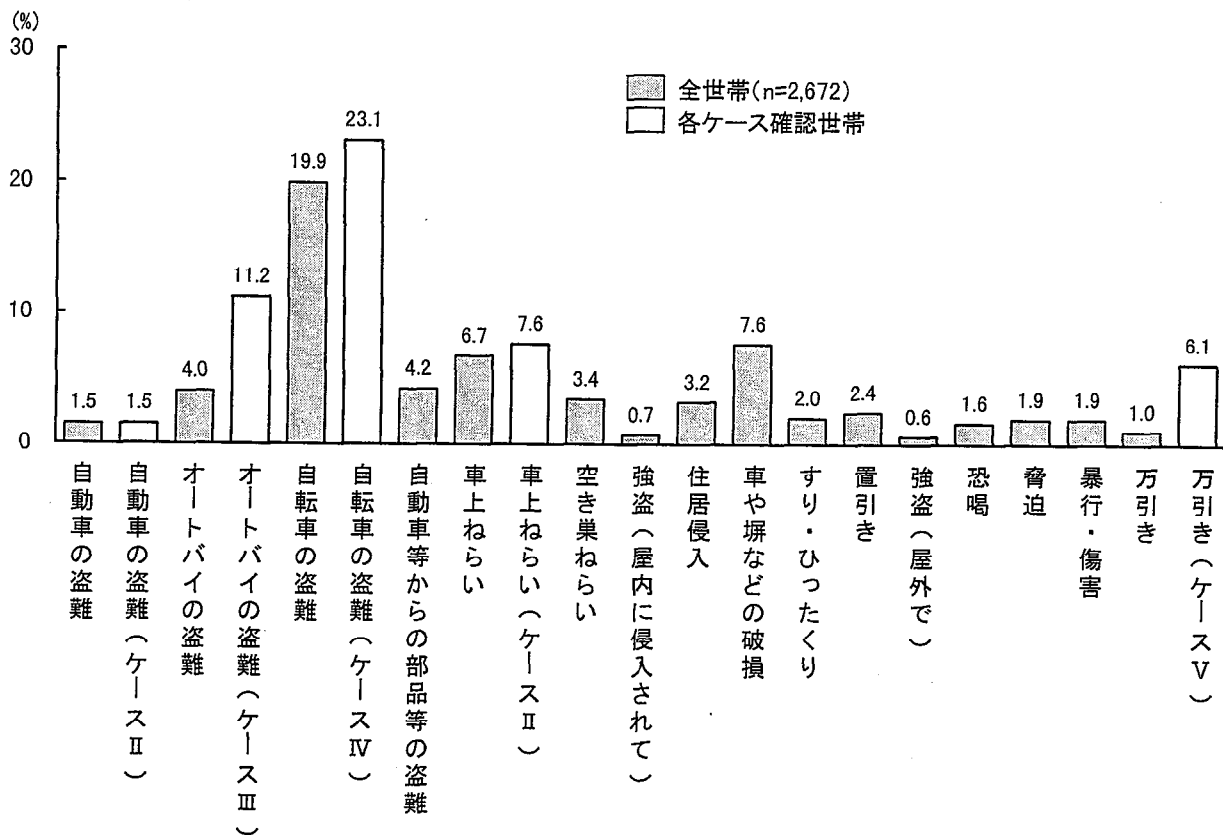
a. 罪種の相互比較からみた犯罪遭遇世帯

実被害があったか否かは別にして、家族（世帯）が犯罪に遭遇する危険性の最も高いのが「自転車の盗難」で19.9%、次いで「車や塀などの破損」が7.6%、「車上ねらい」が6.7%、「自動車等からの部品等の盗難」が4.2%、「オートバイの盗難」が4.0%と比較的高い犯罪遭遇世帯率を示している（図2-1）。

自転車盗に関しては自転車を保有している世帯の5世帯に約1世帯以上が、オートバイ盗に関してはオートバイを所有している世帯の5世帯に約1世帯以上が、1年間に1回は被害に遭うとみられる。

以上の軽微な犯罪に対し、重大な犯罪の遭遇世帯の発生は低い。特に、身体に被害が生じるような罪種に関する遭遇世帯の発生は低くなっている。

図2-1 犯罪遭遇世帯の発生状況



注) ケースⅡ＝自動車保有確認世帯(n=2,253)、ケースⅢ＝オートバイ保有確認世帯(n=649)、
 ケースⅣ＝自転車保有確認世帯(n=2,078)、ケースⅤ＝万引き被害の可能性職業従事者確認世帯(n=358)

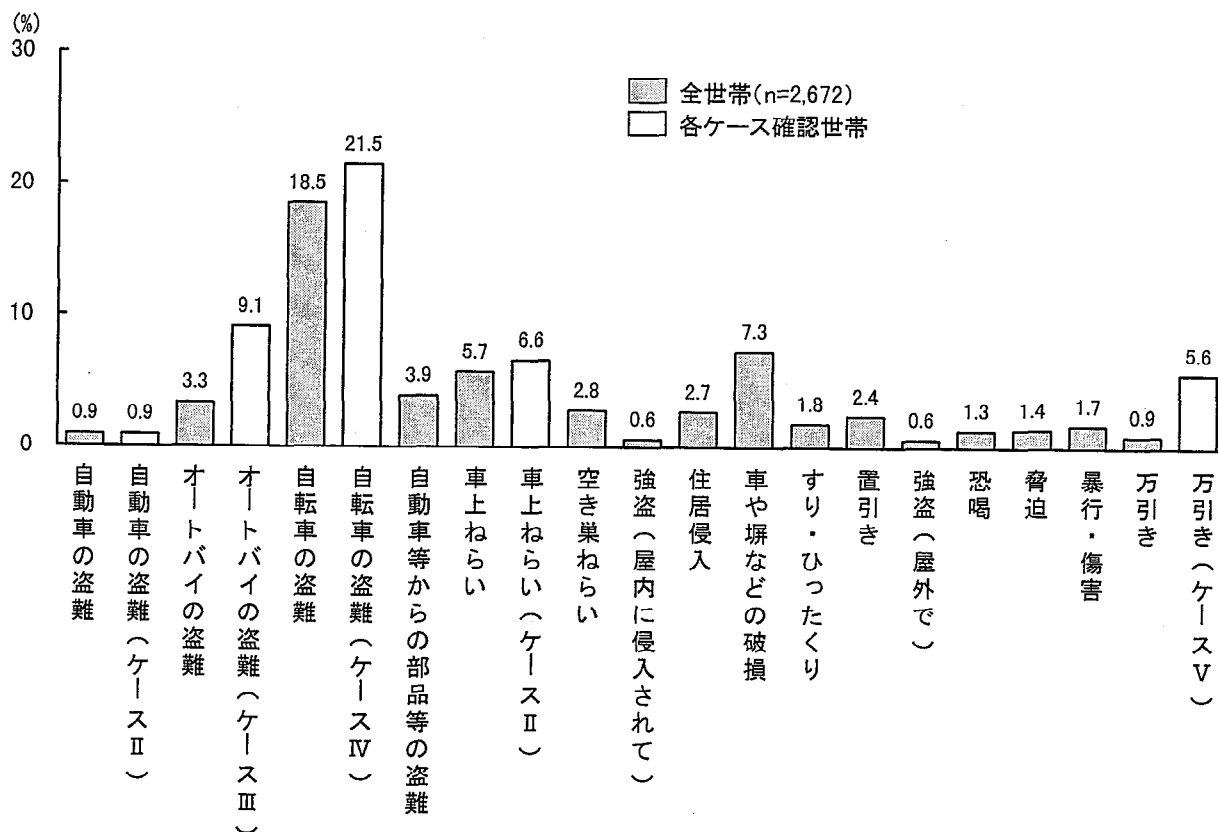
b. 犯罪遭遇実被害発生世帯

ここでも「自転車の盗難」が実被害の生じる犯罪に遭遇する危険性が最も高く18.5%となり、次いで「車や塀などの破損」が7.3%、「車上ねらい」が5.7%、「自動車等からの部品等の盗難」が3.9%、「オートバイの盗難」が3.3%と比較的高い犯罪遭遇世帯率を示している(図2-2)。

自動車を保有している世帯に絞っても自動車盗は0.9%となっているが、自転車盗は自転車保有世帯の21.5%、オートバイ盗はオートバイ保有世帯の9.1%となっている。万引きは万引き被害の可能性職業従事者確認世帯においては5.6%となっている。

罪種別の傾向及び発生率は、先の犯罪遭遇世帯の発生傾向と同じである。

図2-2 犯罪遭遇実被害発生世帯の発生状況



注) ケースⅡ=自動車保有確認世帯(n=2,253)、ケースⅢ=オートバイ保有確認世帯(n=649)、
 ケースⅣ=自転車保有確認世帯(n=2,078)、ケースⅤ=万引き被害の可能性職業従事者確認世帯(n=358)

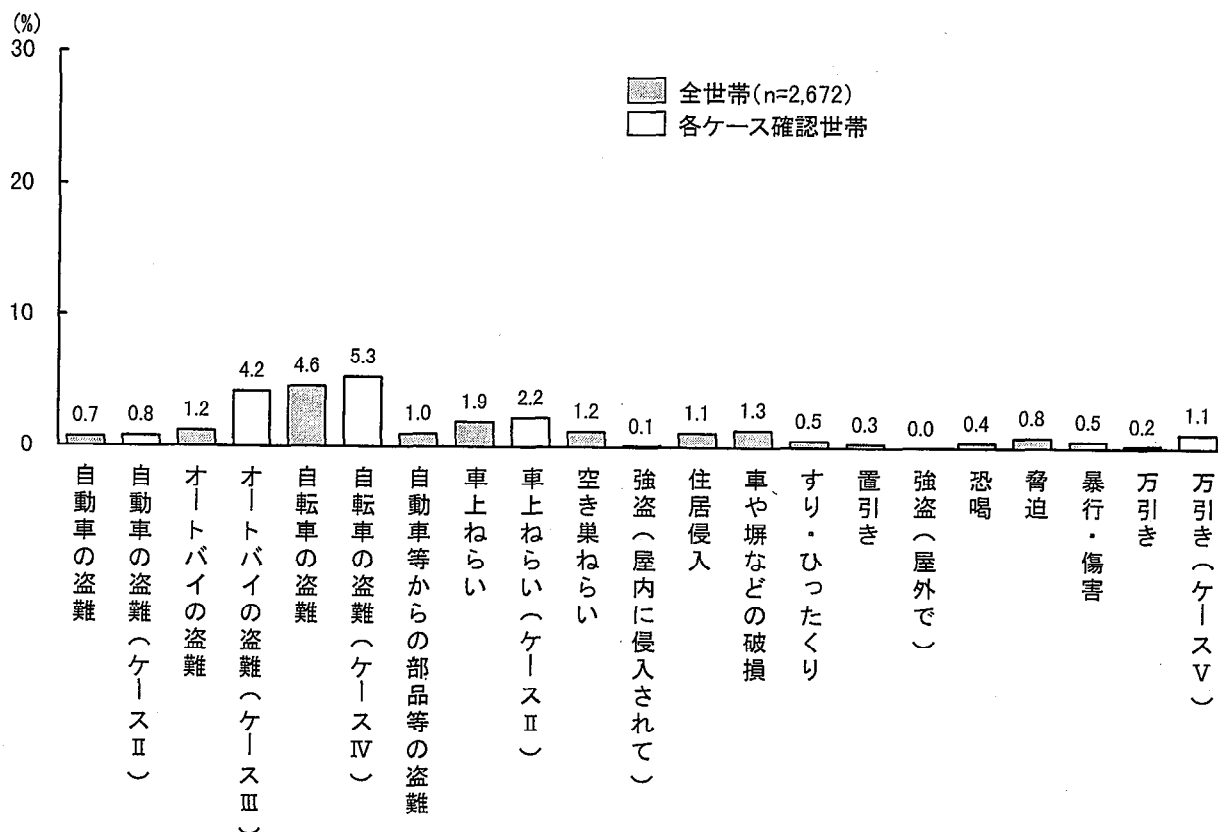
c. 犯罪遭遇実被害なし世帯

いずれの罪種とも、犯罪遭遇世帯及び犯罪遭遇実被害発生世帯の各発生率に比べて犯罪遭遇実被害なし世帯の発生率は低くなっている。

最も高いのは「自転車の盗難」が4.6%で、その他は2%未満と極めて低率となっている（図2-3）。

自転車保有世帯に限ってみると、自転車の盗難は5.3%となっている。オートバイ保有世帯に限ったオートバイの盗難の発生率は4.2%となっている。

図2-3 犯罪遭遇犯罪遭遇実被害なし世帯の発生状況



注) ケースII=自動車保有確認世帯(n=2,253)、ケースIII=オートバイ保有確認世帯(n=649)、
 ケースIV=自転車保有確認世帯(n=2,078)、ケースV=万引き被害の可能性職業従事者確認世帯(n=358)

② 罪種別にみた犯罪遭遇世帯の発生状況のまとめ

以上のような記述を踏まえ、以下のような点が指摘できる。

- ・ 自転車盗・オートバイ盗そして器物損壊を中心とした「いたずらの犯罪」あるいは「被害程度の軽微な性的犯罪」といった犯罪が、人々の間で比較的多く発生していることが犯罪遭遇世帯及び犯罪遭遇実被害発生世帯の各発生率の状況から指摘できる。
- ・ 犯罪遭遇実被害なし世帯率は、各罪種とも、他の率に比較し低率となる。被害の生じない犯罪に関しては、人々は「犯罪」として厳しく認知することがあまりないことのあらわれともみられる。